姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第97集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第408次発掘調査報告書―

2020

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、日本が誇る世界遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守をはじめとする建造物群が築かれて以来、400 年を経た現在もその威容を誇っています。

姫路城下町は、姫山・鷺山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核施設が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されます。このうち内曲輪と中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され、保護・顕彰が図られています。

一方、外曲輪は近代以後、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨地域の中核都市に相応しいまちづくりが進められています。今回調査を行った北条口二丁目 77 は、外曲輪南東部の寺社地・町屋地域・侍屋敷地に位置します。ここに発掘調査成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和 2 年（2020 年）3 月 31 日

姫路市教育長　松田　克彦

例言・凡例

1. 本書は姫路市北条口二丁目 77 で実施した姫路城跡第 408 次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、住宅建設に先立って実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが行った。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、通し番号を付し、遺構の種類を前につけた。遺構番号は、調査時に使用したものを基本的に踏襲している。遺構種略号は次のように呼称する。
   ST：墓・埋葬遺構、SK：土坑、SD：溝
7. 墓・埋葬遺構の埋葬形態については、谷川章雄　2004「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』江戸遺跡研究会　に準拠する。
8. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
9. 出土した人骨については、安部みき子氏（安部考古動物学研究所）に鑑定を委託し、玉稿を賜った（第 4 章第 2 節）
10. 発掘調査・出土品整理及び報告書作成においては、下記の諸氏から御教示を賜った。深く感謝の意を表したい。（五十音順）
    安部みき子氏（安部考古動物学研究所）、藤井淳也氏（幡念寺副住職）

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会
- 教 育 長　松田克彦
- 教育次長　名村哲哉（平成 30 年度）
- 　　坂田基秀（令和元年度）

生涯学習部
- 部　　長　岡田俊勝（平成 30 年度）
- 　　沖塩宏明（令和元年度）

文化財課
- 課　　長　花幡和宏
- 課長補佐　大谷輝彦（調整担当）
- 技術主任　関　　梓（令和元年度）
- 技　　師　黒田祐介（平成 30 年度）

埋蔵文化財センター
- 館　　長　前田光則
- 課長補佐　岡﨑政俊
- 係　　長　森　恒裕
- 技術主任　小柴治子
- 　　中川　猛
- 　　福井　優
- 　　南　憲和
- 　　関　　梓（平成 30 年度）
- 技　　師　黒田祐介（令和元年度）
- 技 師 補　山下大輝（調査担当）

目　次

第 1 章　調査に至る経緯と経過
- 第 1 節　調査に至る経緯 …… 1
- 第 2 節　調査の経過 …… 1

第 2 章　遺跡の立地と環境

第 3 章　調査成果
- 第 1 節　基本層序 …… 1
- 第 2 節　第 1 面検出遺構と遺物 …… 1
- 第 3 節　第 2 面検出遺構と遺物 …… 4

第 4 章　総括
- 第 1 節　火葬墓群及び土葬墓群について …… 5
- 第 2 節　姫路城城下町跡出土の人骨について … 6

図版目次
- 図版 1　調査地位置図（城郭図）…… 8
- 図版 2　調査区平・断面図（第 1 面）…… 9
- 図版 3　第 1 面遺構実測図 …… 10
- 図版 4　第 1 面遺構実測図 …… 11
- 図版 5　遺物実測図 1 …… 12
- 図版 6　遺物実測図 2 …… 13
- 図版 7　調査区平・断面図（第 2 面）…… 14
- 図版 8　墓坑埋葬形態別分布図 …… 15

写真図版 …… 16

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

姫路市北条口二丁目77において住宅建設が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に所在する。

平成30年9月18日付で事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育長宛にあった。届出の内容に基づいて協議を行い、平成30年10月18日に敷地内の4箇所において確認調査を実施した。調査の結果、全ての調査区で遺構を検出した。確認調査成果に基づき、工事により遺構面が影響を受ける462㎡を対象として、記録保存を図るため本発掘調査を実施することとし、平成30年12月25日に姫路市と事業者とで委託契約を締結した。

第2節 調査の経過

本発掘調査は、敷地内に残土置場を確保するため、2分割して実施した。平成31年1月8日に敷地北側から調査を開始し、2月20日から南側に調査を進めた。確認調査の成果に基づき、2面の遺構面を調査した。調査はバックホウで盛土・造成土等を除去した後、人力で遺構検出、遺構発掘を行い、適宜、記録写真撮影及び遺構実測を行った。3月15日に現地作業を全て終了した。現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理等を実施し、本発掘調査報告書の刊行をもって事業を完了した。

第2章　遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に流れる市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、東は丹波・有馬方面、西は美作・因幡方面に通じる。また南の海上には瀬戸内海航路があるなど陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。池田輝政により、慶長6年（1601）から8年をかけて築城された姫路城は、平野部と独立丘陵である姫山・鷺山を利用した平山城である。市川の支流である船場川を西限とし、三重の堀によって内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされる（図1）。

調査地は、外曲輪南東部に所在する。調査地周辺の道路の多くは絵図に描写されており、近世段階から踏襲されていることがわかる。調査地は寺社地であるがその北・西隣は町屋敷地、東・南隣は侍屋敷地となる。

一次榊原氏時代（1649 ～ 1667）の『姫路御城廻侍屋鋪新絵図』によると調査地は「比丘尼寺」とあり、その西隣には「幡念寺」とある。二次松平氏時代（1667 ～ 1682）の絵図では「比丘尼寺」が消え、その西隣には「万念寺」と記される。二次本多氏時代（1682 ～ 1704）の『播州飾東郡国衙庄姫路図』によると調査地は「播念寺/浄土宗」その東隣は「宝泉寺」とある。これは二次榊原氏時代（1711）の絵図にも「幡念寺」「ホツセン寺」と二次本多氏時代と同様の名が記される。また酒井氏時代入封初期（1749 ～）の絵図には従来「宝泉寺」ないし「ホツセン寺」と記されていた位置に「寺」とだけ記され、その西隣は空欄となっている。酒井氏時代中期（18世紀中頃）には「番念寺」、「宝泉寺」と記される。酒井氏時代後期（文化3年（1806））の絵図には、これまで「宝泉寺」ないし「ホツセン寺」と記されていた区画は明示されているが「幡念寺」に取り込まれている。つまり絵図に従えば、17世紀中葉から19世紀以前は「幡念寺」と「此丘尼寺」もしくは「宝泉寺」が並ぶ景観であり、19世紀以降は「宝泉寺」境内区域を「幡念寺」が取り込む。戦前の地図にも幡念寺は明示されており、調査地に墓域と示されている。以上のことから、今回の調査地では幡念寺もしくは宝泉寺境内に関する遺構の検出が予想された。

第3章　調査成果

第1節　基本層序（図2）

調査地の層序は地点によって異なるため、調査区東壁を基準として述べる。現地表は標高12.30m ～ 11.78mで北から南へとやや傾斜する。地表面から0.25m ～ 0.40mまでが現代盛土、その下に約0.20mの厚さで近代整地層がみられるが、この近代整地層を部分的に第二次世界大戦時の焼土層（以下、戦災焼土層）が切り込んで堆積している。以下、0.25mの厚さで近世・近代整地層、0.10m ～ 0.20mの厚さで近世整地層、0.2mの厚さで中世耕土が順に堆積し、この下層に褐色細砂土からなる地山がある。調査は第1面を中世耕土上面、第2面を地山上面として行った。

第2節　第１面検出遺構と遺物（図3・4）

中世耕土上面で検出した遺構である。火葬墓群・土葬墓群・溝などを検出した。以下では主な遺構について述べる。

火葬墓群　調査区北西部を中心に検出した。ST18・20・22・25・27 ～ 33・35・40・45-1・45-2、48・67によって構成される。いずれも掘方底部に壺を据えており、壺の形態から、胞衣壺や火消し壺を火葬蔵骨器に転用したものと考えられる。検出面では壺の大部分が削平されており、壺内部からの遺物も、ほとんど確認されなかった。SK45-2の壺などは、完形の状態で検出することができた。

ST18　平面円形で、径0.48m、検出面からの深さは0.34mを測る。底に甕が正位置で据えられていた。
ST20　平面円形で、径0.28m、検出面からの深さは0.22mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST25　平面円形で、径0.35m、検出面からの深さは0.10mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST27　平面円形で、径0.27m、検出面からの深さは0.10mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST28　平面円形で、径0.21m、検出面からの深さは0.70mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST29　平面円形で、径0.35m、検出面からの深さは0.10mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。

ST30　平面円形で、径0.25m、検出面からの深さは0.15mを測る。陶器壺が正位置で据えられていた。
ST32　平面円形で、径0.30m、検出面からの深さは0.16mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST33　平面円形で、径0.24m、検出面からの深さは0.15mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST35　平面円形で、径0.30m、検出面からの深さは0.14mを測る。土師質壺が正位置で据えられていた。
ST40　平面円形で、径0.35m、検出面からの深さは0.10mを測る。土師質壺の側面が底部に接して据えられていた。
ST45-1・2　平面楕円形で、長軸0.5m・短軸0.45m、検出面からの深さは0.15mを測る。土坑中央部から南北方向に並んで壺2基が出土した。壺それぞれの掘方はなく、2基同時に埋葬したと考えられる。南側の壺は施釉陶器で、取手付蓋（図5-1）により密閉されていた。対して北側の壺（ST45-1)(図5-2）は土師質で、蓋は検出されなかった。
ST48　平面楕円形で、長軸0.69m・短軸0.42m、検出面での深さは約0.3mを測る。掘方中央部から土師質壺が出土した。これに施釉陶器蓋が共伴する（図5-3)。
ST67　平面円形で、径0.3m以上・深さ0.5mを測る。掘方底部では、土師質壺が蓋とともに出土した(図5-4・5)。

土葬墓群　ST1・2-1・2-2・2-3・2-5・3・6・11・12・16-1・16-2・34・41・46-1・46-2・53・57・58・65・68・70・81・83 ～ 87・105 ～ 108・110 ～ 115・117 ～ 120・2ST1・2ST3-1・2ST3-2・2ST3-3・2ST3-4・2ST12-1・2ST12-2・2ST12-3、2ST18・2ST21-1・2ST21-2・2ST22・2ST23などで構成される。
ST1　平面規模は、長軸1.27m･短軸1.1m以上で、楕円形の掘方を有すると考えられる。掘方底部の標高は、10.6mである。掘方底部では、幅0.67m・高さ0.6m以上の木槨を検出し、木槨内には甕が据えられており、甕と木槨の間には炭が充填されていた。木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓に類する。掘方からは、土師器皿が2点出土した（図5-6・7)。いずれも底部外面には､糸切痕跡が確認できる。この他に寛永通宝が出土した(図5-8)。寛永通宝は､古寛永であることから寛永13年(1636)以降に鋳造されたものとわかる。出土遺物はすべて副葬品と考えられる。銅銭の年代から遅くとも17世紀中葉以降に埋葬されたと考えられる。
ST2-1　平面規模は、約0.9m四方で、掘方は方形を呈する。掘方底部の標高は、10.2mであり、底部には木槨が据えられていた。木槨の規模は、長辺0.6m・短辺0.55m・高さ0.64m以上で、木槨内には木棺が正位置で据えられ、木棺間には炭が充填されていた。木炭・木槨木棺墓に類する。
ST2-2　ST2-1・3を切り込んで形成される。平面規模は、約0.6m四方の掘方を持つ。掘方底部の標高は10.78mであり、甕が正位置で据えられる。甕棺墓である。
ST3　ST1に切り込まれる。平面規模は長軸0.9m・短軸0.82mで、楕円形の掘方を有する。掘方底部の標高は、10.4mである。底部には甕が据えられ、木槨の痕跡なども確認できないため甕棺墓であると考えられる。
ST6　平面規模は､0.86m四方で方形の掘方をもつ。検出面からの深さは0.93mであり､掘方底部には甕が据えられていた。甕の規模は高さ0.67m・幅0.58mで、甕の内面底部からは、人骨片を検出した。甕棺墓である。掘方埋土から土師器皿が出土した（図版5-9)。底部外面には糸切痕が確認でき、形態はST1から出土した土師器皿に類似する。
ST12　平面規模は、径約1.09mで、掘方は円形を呈する。検出面からの深さは1.0mである。掘方底部には、備前焼大甕が据えられていた。長軸0.82m・短軸0.55m・厚さ0.1mの巨石を蓋にしており、甕内部からは少量の遺物片と人骨が出土した。甕棺墓であると考えられる。
ST16-1　ST46-2に切り込まれる。平面規模は幅0.8mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは1.05mである。掘方底部には木槨が据えられ、木槨内部には甕が据えられていた。方形木槨甕棺墓である。甕棺外面底部には、「小志/□」との墨書が確認できた（写真図版6-5)。また染付磁器小碗・紅皿などの副葬品が出土した（写真図版6-1)。
ST16-2　ST16-1に切り込まれる。平面規模は幅1.0mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは1.4mである。掘方底部には木棺が据えられていた。方形木棺墓である。
ST34　平面規模は、径0.34mである。掘方は円形を呈し、深さは0.2mである。掘方一杯に1基の甕が据えつけられ、埋甕遺構ともいえるが、周囲の遺構の性格から類推すると甕棺墓である可能性が高い。
ST46-1　平面規模は、東西1.78m・南北約2.0m以上である。方形を呈する掘方をもつ。検出面からの深さは1.5mである。後述するST46-2とともに、掘方底部に木槨が据えられ、木槨内に甕が据えられている状態であった。この甕の底部外面には、三角形の墨書が確認できる（図5-10)。方形木槨甕棺墓である。
ST46-2　ST46-1の北側で検出した。検出面からの深さは1.5mで、掘方底部にはST46-1と同様に、木槨が据えられていた。この木槨内に甕が正位置に配されていた。甕の規模は、高さ0.69m・幅0.5mである。方形木槨甕棺墓である。
ST53　平面規模は、約0.9m四方で方形の掘方を有する。検出面からの深さは、1.15mである。掘方底部には、高さ0.8m・幅5.7mの木棺が据えられていた。方形木棺墓である。
ST57　平面規模は、長軸1.1m・短軸0.9mで、やや楕円形に近い方形の掘方をもつ。掘方底部の標高は、10.74mである。掘方底部では、平面プランを検出し、木棺の一部と考えられる木材も検出した。甕が出土しなかったことから方形木棺墓であると考えられる。
ST58　平面規模は、約0.8m四方で方形の掘方をもつ。掘方底部の標高は、10.7mである。掘方中央部で、高さ0.35m以上・幅0.45mの木棺を検出した。木棺は、底板及び側板が残存していた。内容物については、土壌化したと思われる。埋葬形態はST57と同様に、方形木棺墓であると考えられる。
ST68　SK70を切り込んで形成される。平面規模は南北0.99mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは、1.52mで掘方底部には木棺が据えられていた。木棺内部からは、正位置で配置された甕を検出し、木棺と甕の間は、木炭で充填されていた。木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓に類する。
ST81　平面規模は、幅0.82m以上で、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは1.65mである。掘方底部には、高さ0.85m

以上・最大幅0.89mの二重木槨を据え付け、この内部に高さ0.74m・幅0.53mの甕を正位置で据える。
ST83　平面規模は南北1.65m四方で、掘方はおよそ方形を呈する。掘方底部の標高は10.28mである。掘方底部では、木槨もしくは木棺の一部とみられる木板を検出した。木板の外面は漆喰で固められていたことから木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓もしくは木炭・漆喰床・槨木槨木棺墓である可能性がある。
ST84　平面規模は、約0.8m四方で方形の掘方を有する。深さは、検出面から0.49mである。掘方中央部には、高さ約0.24m以上・幅0.68mの木槨を据えつけ、この内部に甕を配する。木槨と甕の間には埋土が堆積するのみであることから方形木槨甕棺墓であると考えられる。
ST85　平面規模は、約0.8m四方で、掘方は方形を有する。深さは、検出面から約0.9mである。掘方中央部に幅0.62mの木槨が据えられ、この内部に高さ0.7m・幅0.54mの甕が正位置で据えつけられていた。木槨と甕の間は炭で充填されており、木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓に類する。
ST105　平面規模は、1.05m四方で、掘方は方形を呈する。掘方底部の標高は10.64mである。底部には木槨の痕跡とみられる木片が確認でき、その上層に高さ0.79m・幅0.6mの甕が正位置で据えられていた。埋葬形態は、甕棺墓に類する。埋土からは、染付碗が1点（図5-11）、土師器皿が2点（図5-12・13）出土した。土師器皿は、いずれも底部外面に糸切痕が確認できる。染付碗は、口縁部外面に卍文帯を配し、高台内には「成化年造」の銘を入れる。
ST106　平面規模は長軸1.16mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは1.1mである。掘方底部中央部には、木槨が据えられ、木槨内部には甕が正位置で配されていた。木槨と甕の間は炭で充填されていることから、木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓であると考えられる。
ST107　ST106を切り込む。平面規模は、幅1.0mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは、1.1mである。掘方底部中央部には、幅0.6m・高さ0.73m以上の木槨が据えられ、木槨内部には甕が正位置で据えられていた。木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓である。
ST108　平面規模は、幅0.9m以上で、方形の掘方を有する。掘方の西半部は、調査区外へと延びる。深さは、検出面から約0.87mであり、掘方底部の標高は、11.19mである。掘方中央部には、高さ0.8m以上・幅0.53 ～ 0.69mの木槨が据えられ、木槨内部には、高さ0.7m・幅0.62mの甕が正位置で配される。この甕は、長軸0.58m・厚さ0.11mの平石で蓋をされる。木槨と甕の間は、炭で充填されていることから、木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓である。またST108下層でも甕を検出した。ST108形成以前に埋葬されたものであることは、層位から明らかであり、同一地点において繰り返し埋葬を行っていることがわかる。
ST110　ST114に切り込まれる。平面規模は約0.8m四方で、方形の掘方を有する。検出面からの深さは、0.83mであり、掘方底部の標高は、10.84mである。底部から0.15m上層で、高さ0.65m・幅0.5mの甕が正位置で据えつけられる。埋葬形態は、甕棺墓である。
ST112　平面規模は、径0.36m以上で、円形の掘方を有する。検出面からの深さは0.54mで、掘方は垂直である。検出面から約0.40m下で甕が正位置に据えられていた。甕棺墓である。
ST113　平面規模は、南北1.4m以上・東西1.0mで、方形の掘方を有する。検出面からの深さは1.87mで、掘方底部の標高は9.75mである。掘方底部中央部には、高さ0.89m・幅0.71mの木槨が据えられ、内部に高さ0.77m・幅0.52mの甕が正位置で配される。木槨と甕の間には炭が充填される木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓である。
ST117　平面規模は約0.75m四方で方形の掘方を有する。深さは、検出面から約1.1mである。掘方中央部には、高さ0.73m以上・幅0.6mの木棺が据えられていた。
ST118　平面規模は、幅0.7mで、掘方は方形を呈すると想定される。検出面からの深さは0.82mであり、断面観察で木棺もしくは木槨痕跡が確認できることから墓坑であると考えられる。埋葬形態については、方形木棺墓と考えられる。
ST120　ST105に切り込まれる。平面規模は、約0.9m四方で方形の掘方を有する。検出面からの深さは、1.59mであり、掘方底部の標高は、9.97mである。掘方中央部に高さ0.7m・幅0.6mの木槨が据えられ、内部に甕が正位置で据えられていた。また木槨と甕の間は炭で充填されていた。また甕検出高より0.17m上層では、長軸0.58m・短軸0.42m・厚さ0.18mの蓋と思われる平石を検出した。木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓である。
2ST3-1　平面規模は南北0.86mで、方形の掘方を呈する。深さは、検出面から1.13mである。掘方底部には高さ0.53m・幅0.59mの木棺が据えられていた。木棺天井部が崩落しているため正確ではないが、木棺は直方体を呈していたと考えられる。木棺外郭は、漆喰で固められていた。方形木棺墓に類すると考えられる。多数の人骨を木棺内部から検出した。埋土からは眼鏡が出土した（写真図版6-4）。また掘方と木棺の間から、土師器皿が2点出土した（図5-14・15）。
2ST3-2　掘方は方形を呈し、深さは検出面から1.05mである。掘方底部には、高さ0.34m以上・幅0.35m以上の木棺が据えられていた。木棺外郭に漆喰がみられない点で2ST3-1と異なる。方形木棺墓である。
2ST3-3　2ST3-2に切り込まれる。平面規模は、南北0.65m以上で、方形の掘方を有する。掘方底部には、高さ0.44m以上・幅0.5mの木棺が据えられていた。方形木槨木棺墓である。
2ST12-1　2ST12-2・3に切り込まれる。平面規模は南北1.05m以上・東西1.05mで、方形の掘方を有する。検出面から約0.65m下で、長軸1.0m・短軸0.96m・厚さ0.05m以上の巨石が、掘方一杯に1石据えられていた。この巨石を取り除くと、掘方底部から木棺を確認した。この木棺内部には甕が正位置で据えられており、木棺と甕の間は木炭で充填されていた。木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓に類する。甕内部からは人骨が出土した。埋土からは染付碗が出土した（図版5-16）。
2ST12-2　2ST12-1を切り込んで形成される。掘方底部には木棺が据えられていた。木棺の平面規模は、南北0.49m・東西5.0mである。方形木棺墓に類する。遺物はない。
2ST12-3　2ST12-2に切り込まれる。平面規模は、0.4m四方以上で、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは、約1.1mである。方形木棺墓に類する。

2ST18　2ST22を切り込んで形成される。平面規模は径0.9mで、掘方は円形を呈する。検出面からの深さは0.86mである。遺構の規模や形状、周囲の遺構の性格から勘案して墓坑であると考えられる。埋土からは土師器皿が出土した（図5-17）。
2ST21-1　平面規模は長軸0.8m・短軸0.7mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは、1.0mである。掘方底部では木棺底板と側板の一部を検出した。木棺の平面規模は、0.48m四方である。方形木棺墓である。
2ST21-2　平面規模は長軸0.9m以上・短軸0.9mで、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは、0.95mである。掘方底部では、木棺底板と側板を検出した。木棺の規模は、長軸0.5m・短軸0.45m・高さ0.3m以上である。方形木棺墓である。埋土からは染付煙管の雁首・吸口が出土した（図6-18）。
2ST22　2ST18に切り込まれる。平面規模は径1.03mで、掘方は円形を呈する。検出面からの深さは1.26mである。掘り下げ段階において、検出面から0.5m下で、長軸0.6m・短軸0.5mの平石を1つ検出した。その下層には、甕が据えられており、上層の平石は蓋であると考えられる。甕の規模は、高さ0.54m以上・最大幅0.47mである。甕棺墓に類する。
2ST23　平面規模は、東西約0.8m・南北0.7m以上で、掘方は方形を呈する。検出面からの深さは1.11mである。掘方底部には南北約0.5m・東西約0.6mの木棺が据えられていた。方形木槨甕棺墓に類する。

土坑　SK14・15・29・36・39・42・56・61・71・90・92・93・96・99・100・101・102・103・109・2SK4・2SK9・2SK11・2SK13を検出した。ここでは主な遺構の概要を述べる。
SK14　平面規模は径0.5mで、掘方は円形を呈する。深さは0.52mである。遺構の上面には長軸0.32m・厚さ0.03mの平石が据えられていた。周囲の遺構の性格から勘案して墓坑であると考えられる。
SK29　径0.26m・深さ0.18mである。掘方は円形を呈する。甕などは検出しなかったが、周囲の遺構の性格から火葬墓のひとつであった可能性がある。
SK39　2SK3を切り込む土坑である。2SK3埋土の一部を掘削した可能性もわずかに考えられるが、2SK3埋土とは異なる土質であったため土坑と認識した。埋土から中心飾り中房付三葉文を配する唐草文軒平瓦が出土した（図版6-30）。上外区上縁に幅均一な面取り、顎接合部平瓦際にヨコナデ、顎部平瓦際には凹むほどのユビナデを行う。2SK3-1掘方で出土した土師器皿との関係から17世紀中葉頃に埋没したと考えられる。
SK61　平面規模は径0.65m・深さ0.58mを測る。掘方は円形を呈する。埋土からは染付合子や簪など副葬品と考えられる遺物が出土した（写真図版6-2）。土坑墓である可能性も否定できないが、周囲で土坑墓を検出していないため、ここでは土坑として記述することとした。
SK71　平面規模は東西1.1mを測り、掘方は方形を呈すると考えられる。深さは1.22mである。埋土上層からは甕が出土した。この甕の内部からは、骨片を入れた施釉陶器壺が出土した（写真図版6-3）。この甕がSK71に伴う遺物であるかは、遺構の切り合いなどから判然としなかったため埋葬遺構と断定せず、土坑として記述することとした。
SK99　平面規模は長軸3.3m・短軸1.4m・深さ0.24mで、掘方は隅丸長方形を呈する。埋土からは近世の遺物が出土した。
SK101　平面規模は径2.5m・深さ0.79mである。埋土から土師器皿（図版6-26）、鳥衾瓦が2点と鬼瓦片が出土した（図版6-27～29）。この2点の鳥衾瓦は異笵である。幡念寺や「此丘尼寺」「宝泉寺」所用の可能性も考えられる。
2SK9　ST35下層で検出した土坑である。埋土から土師器皿が6点出土した（図版6-19～25）。いずれも底部外面に糸切痕が確認できる。

溝　SD1・2・5・7を検出した。各遺構について以下に詳細を述べる。
SD1　調査区中央部において検出した溝である。平面規模は、幅1.05～1.25m・南北長約14.5m・東西長約6.0m・総延長20.5mである。断面形状は、北部はやや深いレンズ状を呈し、南部は浅い逆台形状を呈する。深さは、0.25～0.3mである。溝の東肩には石列が据え付けられることから石組み溝である。埋土からは、近世から近代の遺物が出土したことから近世段階に造成され、近代に埋没したことを窺うことができる。加えて中心飾りに松文・七葉文をそれぞれ配する軒平瓦が出土した（図版6-31・32）。またSD1北東部では下層から杭列の痕跡を溝に沿って検出した。
SD2　調査区北東部で検出した。平面規模は延長3.5m・幅0.4～0.6m・深さ0.2mである。SD1とはおよそ平行関係にある。埋土から菊丸瓦が出土した（図版6-33）。菊文は十弁を呈する。
SD5　SD1に切り込まれる東西方向の溝である。平面規模は幅1.7m・延長10.7m以上、断面形状は逆台形状を呈し、深さは0.5mである。埋土は2層に分かれ、下層は暗灰黄色土が堆積するため水性堆積によるものと考えられる。埋土から焙烙・土師器羽釜・須恵器椀・擂鉢が出土した（図版6-34～39）。焙烙は、その形態属性からA3類に属するものと考えられ（中川2012）、17世紀中頃までにおさまると考えられる。須恵器はいずれも中世のものである。遺構の切り合い、出土遺物から勘案するとSD5は17世紀中葉までに埋没したと考えられる。
SD7　南北方向の溝である。平面規模は幅1.3m以上・延長約3.7mで、深さは0.46mである。溝の東肩は、調査区外へと延びる。SK101～103によって切り込まれ判然としないが、東西方向に延びるSD5に接続する一連の溝である可能性が高い。埋土から土師器皿が出土した(図版6-40)。底部外面は、手捏ねで体部口縁際から内面はナデが施されている。土師器皿は、17世紀前葉ごろのものと考えられる。

第3節　第2面検出遺構と遺物（図7）

地山面で検出した遺構である。検出した遺構は溝・土坑である。
2SD1　SD1・4に切り込まれる北西・南東方向の溝である。平面規模は、幅0.8m以上・延長8.4m以上である。断面形状は緩やかなレンズ状を呈し、深さは0.13mである。遺物はない。
2SD2　平面規模は幅0.4m・延長1.2m・深さ0.1mである。遺物はない。

2SD3　北西から南東方向に延びる溝である。平面規模は、幅約0.5m・延長2.2m・深さ0.1mである。断面形状は、逆台形状を呈し、深さは0.24mである。
2SD4　平面規模は、幅0.4m・延長1.0m・深さ0.2mである。遺物はない。埋土の質や溝の位置から、2SD3と一連の溝である可能性が考えられる。
2SK30　平面規模は、南北1.1m・東西1.0m・深さ0.12mである。掘方はおよそ方形を呈する。遺物はない。
2SK31　平面規模は南北1.3m・東西1.0m・深さ0.3mである。掘形はおよそ方形を呈する。遺物はない。

第4章　総括

第1節　火葬墓群及び土葬墓群について

今回の調査では、幡念寺または宝泉寺に伴う墓域の遺構を良好に検出した。墓域がいずれの寺院に属するものかとの問題については、絵図から勘案する限り今回検出したSD1は、幡念寺境内を区画するものであることが明らかであり、またSD1の東側・南側（幡念寺境内外）において埋葬遺構が確認されなかったことからも、検出した埋葬遺構は全て、幡念寺に伴うものと考えておきたい。

近世墓に関する発掘調査では、江戸遺跡の大名墓や寺院墓を中心に、各地の大名墓などから成果が多数上がっている。それらの成果をもとに近世墓に関する考古学的研究は、埋葬形態・副葬品・墓標・遺体などの視点から進められている。今回の調査では、副葬品も比較的少量であり、墓標も残存してなかったことから埋葬形態を中心に若干の考察を述べる。なお出土人骨については、安部みき子氏（安部動物考古学研究所）にその所見をまとめていただいた。

これまでの研究成果としては、埋葬形態の差異が身分・階層の表徴として認識されており、近年では寺院の格式・規模と埋葬形態と被葬者の身分・階層との間に対応関係があるとの指摘がある（谷川2010）。このほかに棺に大甕を用いるのは武家の格式を示すものと推察されるなど（谷川2010）、埋葬形態の差異は被葬者の復元に有力な手掛かりとなることが判明している。

今回の調査で検出した火葬墓群及び土葬墓群は、およそ北東から南西方向にいくつかの列をなす遺構配置であることがわかる（図8）。埋葬形態別の遺構配置に着目すると、幡念寺伽藍に近い位置に火葬墓・木棺墓が集中しており、伽藍から離れたSD1に近い位置で木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓、方形木槨甕棺墓が集中する傾向が確認できる。甕棺墓は点在するような配置である。但し、墓道は確認できなかったことから具体的な寺院墓域の景観復元は難しい。谷川章雄氏によると、木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓には家老（700石のち400石）・旗本（5000石）、方形木槨甕棺墓には家老（700石のち400石）・旗本（1200 ～ 5000石）・藩士（120石）が被葬者との見解が示されている（谷川2004）。これに関連して、幡念寺副住職藤井淳也氏から、姫路藩主酒井家に仕えた家臣らが幡念寺の檀家に多く存在したとの御教示をいただいた。埋葬形態を勘案すると、今回検出した墓・埋葬遺構の被葬者は、先行研究同様の身分・階層であった可能性があろう。また副葬品などは少ないものの、ST16-1・2出土の化粧道具、SK61出土の簪、紅皿などの化粧道具や、2ST3-1から出土した眼鏡などは、故人が所有した持ち物と考えられ、被葬者の日常生活をうかがう上で非常に重要な遺物である。

発掘調査で近世墓を集中的に検出したことや、寺院境内の墓域の一端を明らかにした例は、姫路市内では初であり、近世播磨の墓制を考えるうえで非常に意義深い成果であったといえる。今後周辺地域における近世墓の調査成果が上がることを期待したい。

参考文献

谷川章雄　2004　「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』　江戸遺跡研究会
谷川章雄　2010　『江戸の墓制・葬制の考古学的研究』　早稲田大学大学院　人間科学研究科
永井久美男　1996　『日本出土銭総覧』　兵庫埋蔵銭調査会
中川　猛　2012　「焙烙考―姫路と周辺の焙烙について―」『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念論文集　中村友博先生退任記念事業会

第２節　姫路城城下町跡出土の人骨について

安部考古動物学研究所
安部　みき子

姫路城城下町跡から出土した人骨の遺存状態は非常に良い。出土した人骨は性、年齢(Buikstra et 1994)、頭骨の形態（馬場　1991）と身長（藤井1960、佐宗・埴原1998）を推定し、古病理学的観察を行った。また、女性は妊娠回数の目安である耳状面前溝（妊娠痕）の観察を行った。出土した人骨は10体で、そのうち男性3体、女性4体と性別不明3体である。推定年齢は20才代から60才以上の老年までの成人で、未成人は出土していない。

ST12

遺存部位は、頭骨では頭蓋冠の一部と下顎骨、体幹の骨、上肢および下肢骨である。頭骨の縫合はほぼ消失し、下顎骨の多くの歯槽が閉鎖している。性は女性で、年齢は熟年～老年と判定され、身長ならびに頭骨の形態は推定できなかった。

古病理学的所見から胸椎の椎体下方に骨増殖がみられ脊椎症と診断された。

備考：本個体とは別個体と思われる病変の長骨片が1点混入している。

ST53

遺存部位は、頭骨、体幹の骨、上肢骨および下肢骨である。性は女性で、耳状面前溝は深い。年齢は成年で、推定身長は143.4㎝であり、頭骨の形態は長頭に近い中頭である。

その他：仙骨は第5腰椎の仙骨化がみられた。左肩甲骨の肩甲上靭帯の骨化がみられる。

ST85

遺存部位は、ほぼ完形の頭骨、体幹の骨、上肢骨および下肢骨である。性は男性、年齢は壮年と推定され、推定身長は150.6㎝である。頭骨の形態は中頭に近い短頭である。

ST117

遺存部位は、ほぼ完形の頭骨、体幹の骨、上肢および下肢骨である。性は女性で、耳状面前溝がみられる。年齢は青年で、推定身長は144.6㎝であり、頭骨の形態は短頭に近い過短頭である。

ST106

遺存部位は、ほぼ完形の頭骨、体幹の骨、上肢および下肢骨である。性は女性で耳状面前溝は見られない。年齢は成年で、推定身長は137.8㎝で、頭骨の形態は短頭である。

古病理学的観察では左上顎骨の前面に病変（上顎洞炎？）がみられた。左右下顎第1大臼歯の歯冠部に齲蝕がみられた。

ST113

遺存部位は、頭骨、体幹の骨、上肢および下肢骨である。下顎の歯槽が全て閉鎖している。性は不明であるが年齢は老年と判定された。身長の推定ならびに頭骨の形態は推定できない。

ST119

遺存部位は頭骨の前頭骨と頭頂骨のみである。

2ST3-1

遺存部位は、ほぼ完形の頭骨、体幹の骨、上肢および下肢骨である。性は女性で、耳状面前溝がみられた。年齢は熟年で、推定身長は146.2㎝である。頭骨の形態は長頭である。

古病理学的観察では左側頭骨の頚静脈孔内に骨増殖がみられた。また、腰椎に著しい骨増殖がみられ脊椎症と診断され、左右の尺骨の肘関節部にも骨増殖がみられ肘関節症と診断される。

2ST12-1

遺存部位は、ほぼ完形の頭骨、上肢および下肢骨で、体幹の骨は出土していない。性は男性で、年齢は熟年～老年と推定された。推定身長は155.9㎝で、頭骨の形態は中頭に近い短頭である。

ST120

遺存部位は、頭骨、体幹の骨、上肢および下肢骨である。性は長骨が頑丈であることより男性、年齢は壮年と判定され、推定身長は154.2㎝である。

古病理学的観察では下顎右第2小臼歯の歯根部には歯槽膿漏の痕跡がある。

参考文献

Buikstra J.E.・Ubelaker D.H. 1994 Standards for data collection from human skeletal remains. Arkansas Archeological Survey Research Series.

馬場悠男 1991 「人骨計測法」『人類学講座』別巻Ⅰ 雄山閣

藤井明 1960 「四肢長骨の長さと身長との関係に就いて」『順天堂大学体育学部紀要』3 pp. 49-61 順天堂大学体育学部紀要編集委員会

佐宗亜衣子・埴原恒彦 1998 「日本人女性の新しい身長推定式」『人類学雑誌』106（1）pp. 55-66 日本人類学会

図版 1

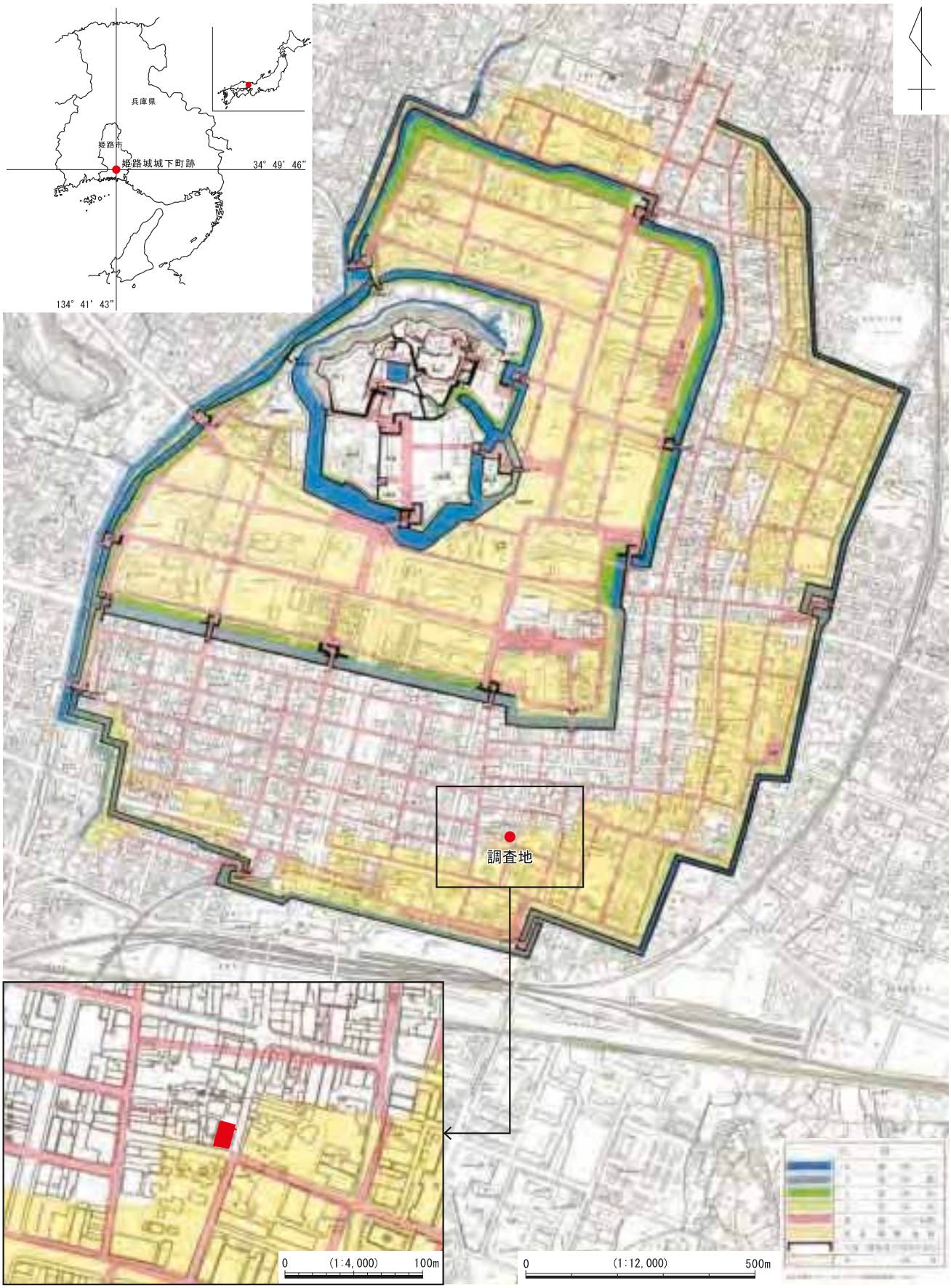


図1　調査地位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭図）』を一部改変・加筆）

図2　調査区 平・断面図（第1面）

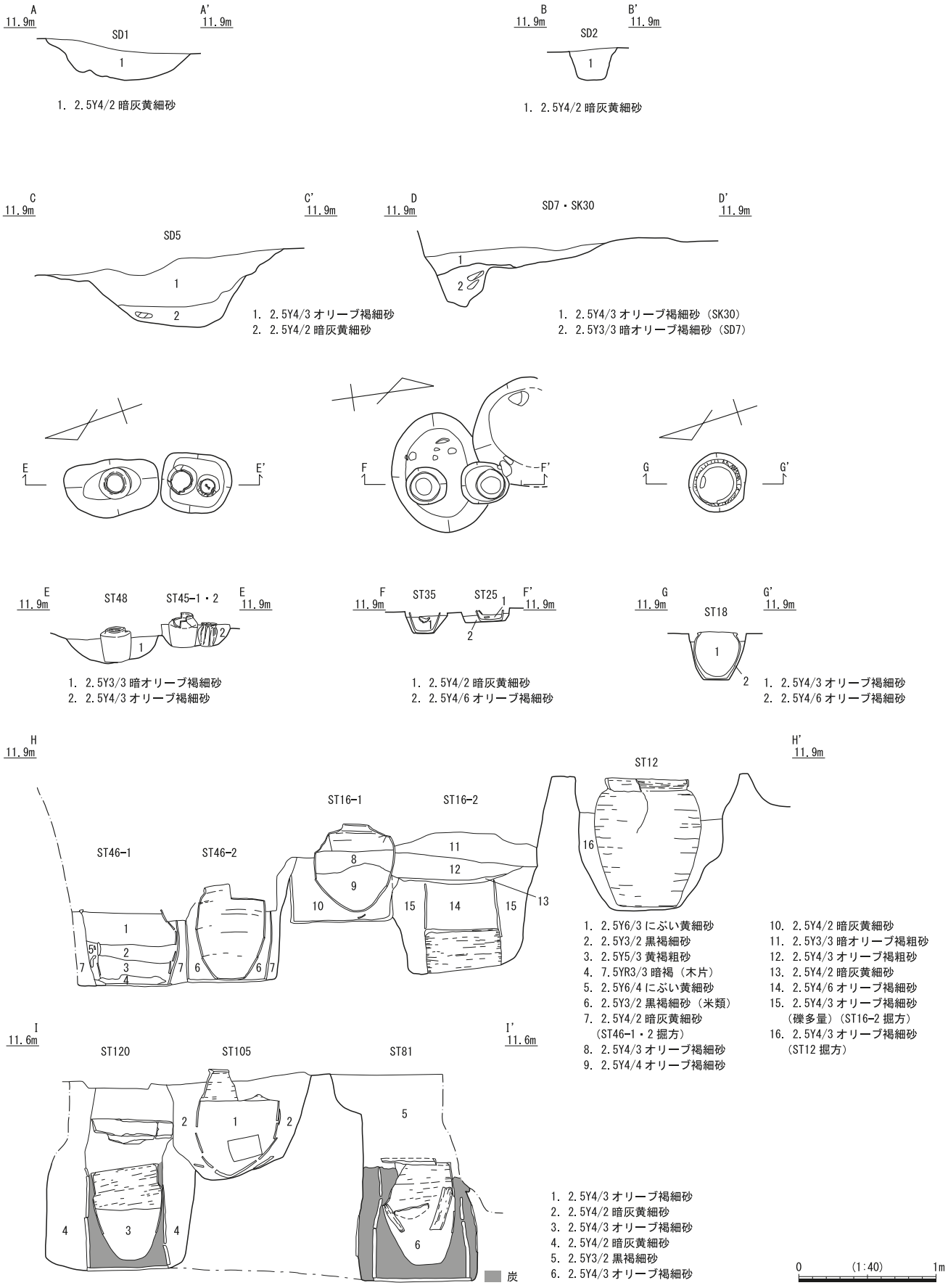
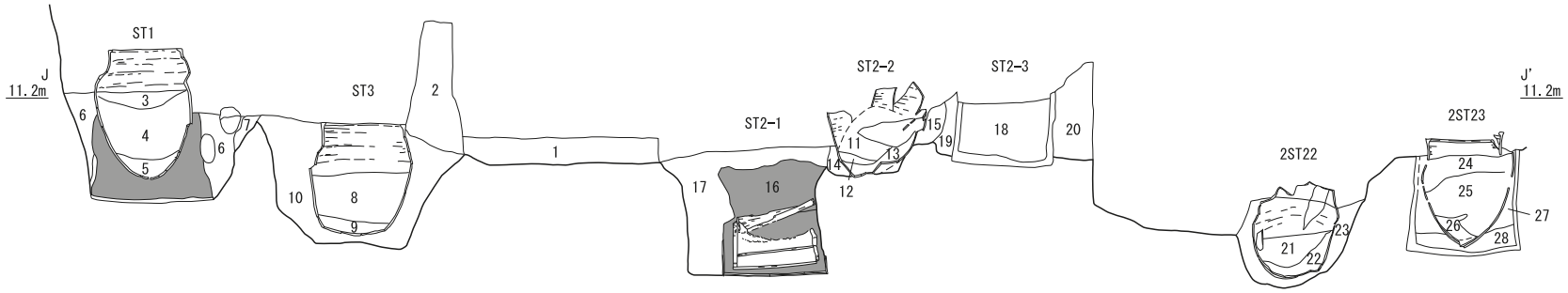
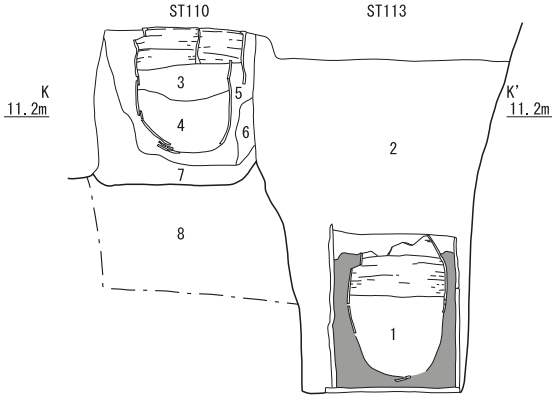

A
11.9m
A'
11.9m
SD1
1
1. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
B
11.9m
B'
11.9m
SD2
1
1. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
C
11.9m
C'
11.9m
SD5
1
2
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
D
11.9m
SD7・SK30
D'
11.9m
1
2
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂（SK30）
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂（SD7）
E
E'
F
F'
G
G'
E
11.9m
ST48
ST45-1・2
E
11.9m
1
2
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
F
11.9m
ST35
ST25
F'
11.9m
1
2
1. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐細砂
G
11.9m
ST18
G'
11.9m
1
2
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐細砂
H
11.9m
H'
11.9m
ST12
ST16-1
ST16-2
ST46-1
ST46-2
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
1. 2.5Y6/3 にぶい黄細砂
2. 2.5Y3/2 黒褐細砂
3. 2.5Y5/3 黄褐粗砂
4. 7.5YR3/3 暗褐（木片）
5. 2.5Y6/4 にぶい黄細砂
6. 2.5Y3/2 黒褐細砂（米類）
7. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
（ST46-1・2 掘方）
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐細砂
10. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐粗砂
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐粗砂
13. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
14. 2.5Y4/6 オリーブ褐細砂
15. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
（礫多量）（ST16-2 掘方）
16. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
（ST12 掘方）
I
11.6m
I'
11.6m
ST120
ST105
ST81
1
2
3
4
5
6
炭
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
5. 2.5Y3/2 黒褐細砂
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
0
(1:40)
1m

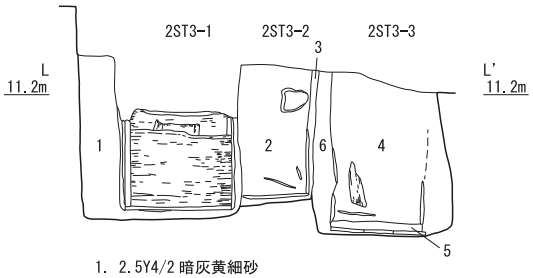
図3　第1面 遺構実測図



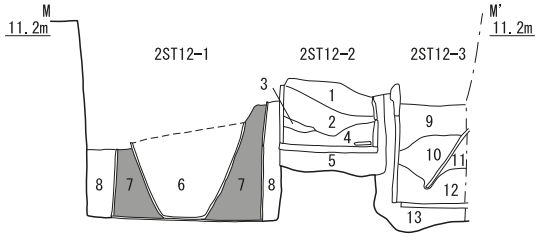
1. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
2. 2.5Y5/2 暗灰黄細砂
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
4. 2.5Y3/2 黒褐細砂
5. 2.5Y3/1 黒褐シルト質細砂
6. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
7. 2.5Y5/3 黄褐細砂
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐粗砂
9. 2.5Y3/2 黒褐細砂
10. 2.5Y4/4 オリーブ褐粗砂
11. 2.5Y4/4 オリーブ褐細砂
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
13. 2.5Y3/2 黒褐細砂
14. 2.5Y5/3 黄褐細砂
15. 2.5Y5/3 黄褐細砂
16. 2.5Y4/4 オリーブ褐細砂
17. 2.5Y3/2 黒褐細砂
18. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
20. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
21. 2.5Y4/4 オリーブ褐細砂
22. 2.5Y3/1 黒褐細砂
23. 2.5Y7/1 灰白細砂
24. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
25. N7/ 灰白細砂
26. N2/ 黒シルト
27. 2.5Y5/6 黄褐細砂
28. 10YR4/2 灰黄褐細砂



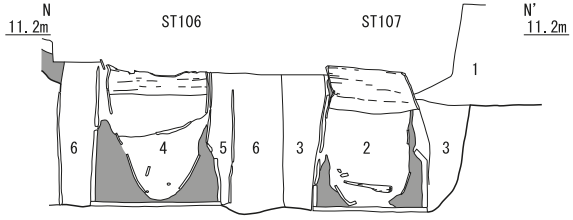
1. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
2. 2.5Y5/2 暗灰黄細砂（礫含む）
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
5. 2.5Y5/2 暗灰黄細砂
6. 2.5Y5/6 黄褐細礫
7. 2.5Y3/2 黒褐細砂
8. 2.5Y5/4 黄褐砂礫（地山）



1. 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
2. 5Y3/2 オリーブ黒細砂
3. 5Y5/1 灰細砂
4. 10Y3/1 オリーブ黒細砂
5. 10YR2/2 黒褐シルト質粘質土
6. 5Y6/1 灰細砂



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
2. 5B6/1 青灰細砂
3. 2.5Y3/2 黒褐細砂
4. 2.5Y3/1 黒褐細砂
5. 5B5/1 灰青細砂
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂
7. 2.5Y2/1 黒（木炭）
8. 2.5Y5/4 黄褐細砂
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂
10. 5B6/1 青灰細砂
11. 2.5Y3/2 黒褐細砂
12. 2.5Y3/1 黒褐細砂
13. 5B5/1 青灰細砂



1. 2.5Y3/2 黒褐砂礫
2. 2.5Y3/2 黒褐粗砂
3. 5Y3/2 オリーブ黒細砂
4. 2.5Y3/1 黒褐細砂
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂

0 (1:40) 1m

図4 第1面 遺構実測図

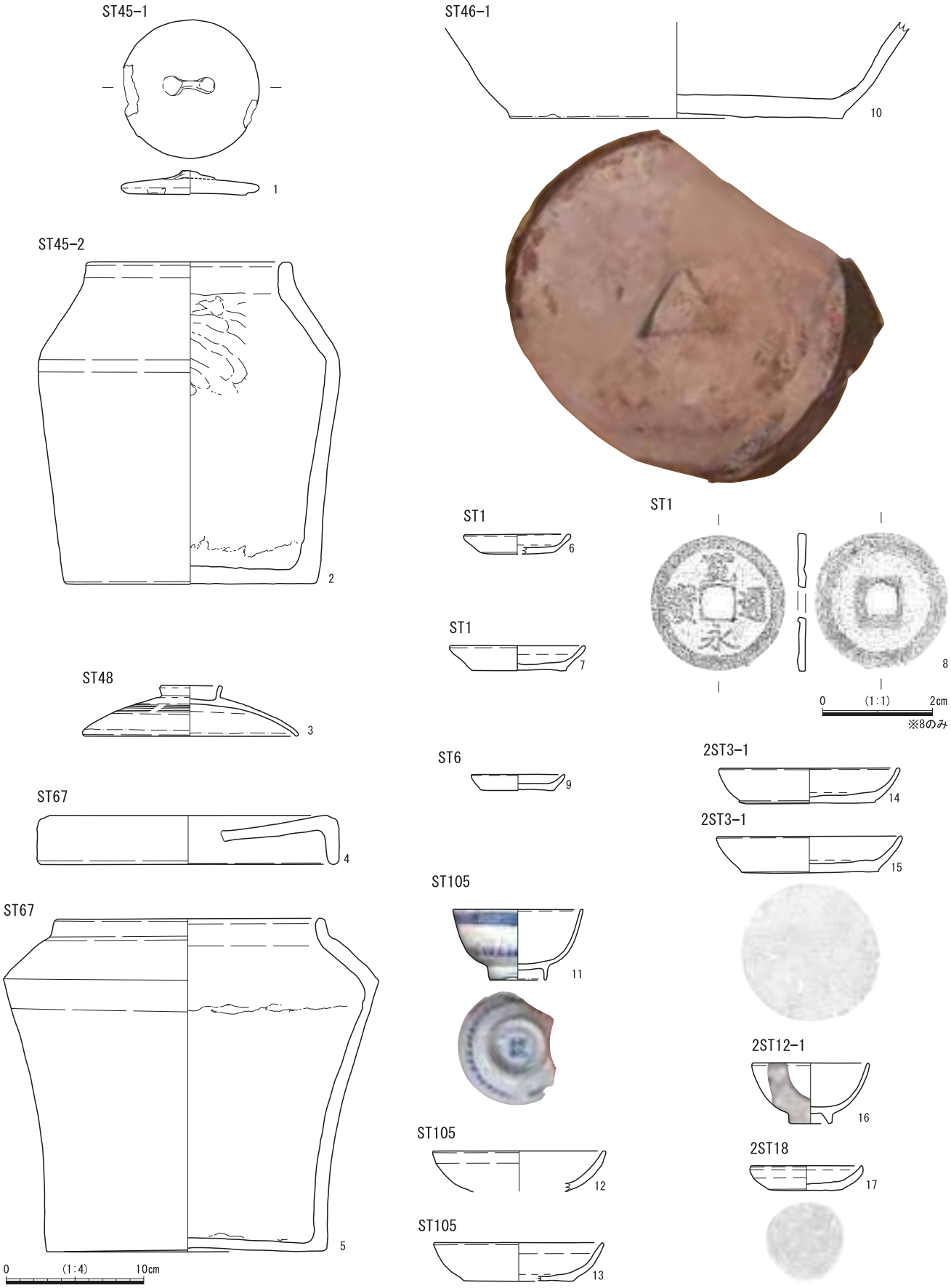

ST45-1
1
ST45-2
2
ST48
3
ST67
4
ST67
5
0 (1:4) 10cm
ST46-1
10
ST1
6
ST1
7
ST1
8
0 (1:1) 2cm
※8のみ
ST6
9
2ST3-1
14
2ST3-1
15
ST105
11
2ST12-1
16
ST105
12
2ST18
17
ST105
13

図5　遺物実測図1

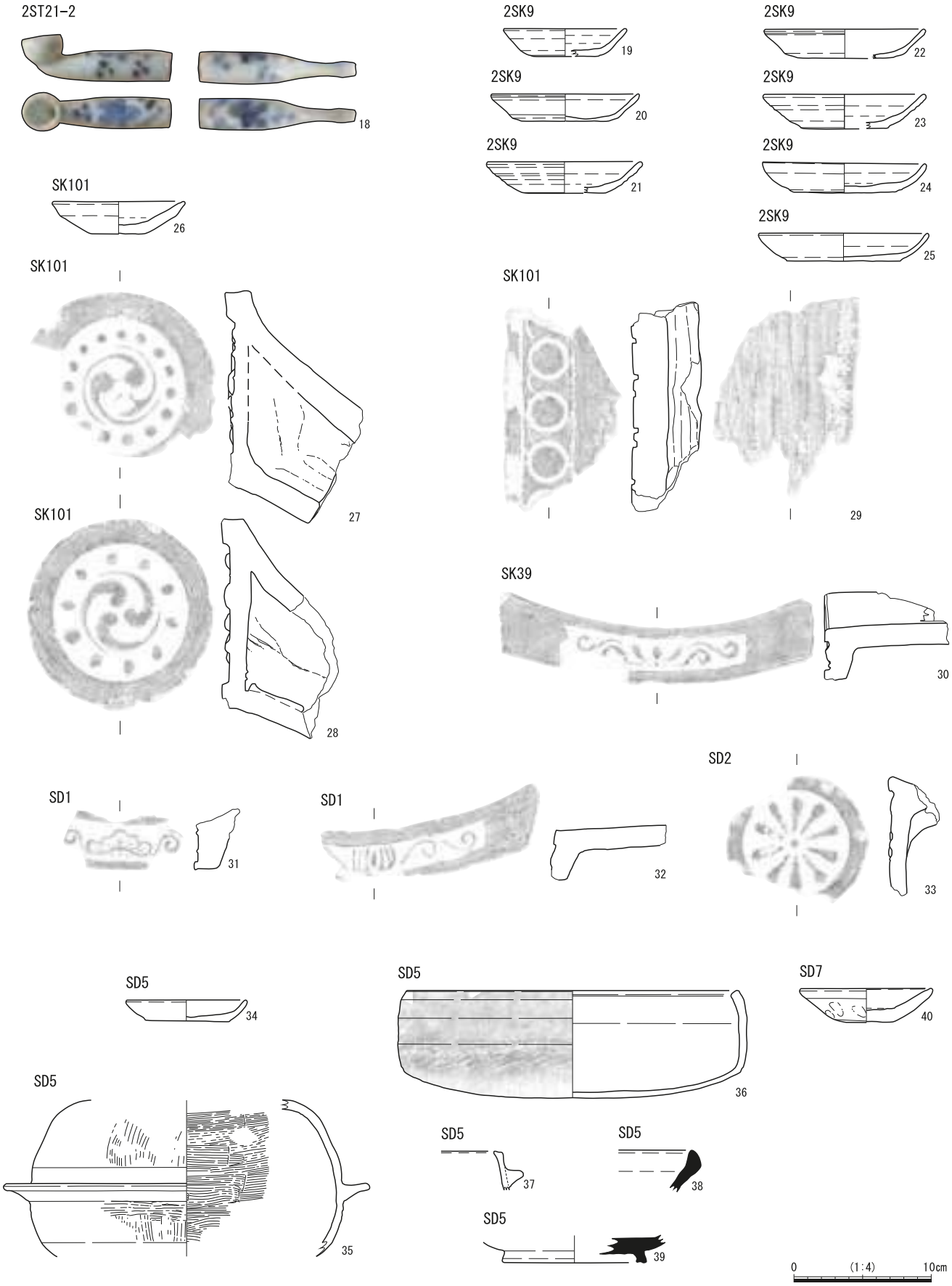

2ST21-2
18
2SK9
19
2SK9
20
2SK9
21
2SK9
22
2SK9
23
2SK9
24
2SK9
25
SK101
26
SK101
27
SK101
28
SK101
29
SK39
30
SD1
31
SD1
32
SD2
33
SD5
34
SD5
35
SD5
36
SD5
37
SD5
38
SD5
39
SD7
40
0
(1:4)
10cm

図6　遺物実測図2

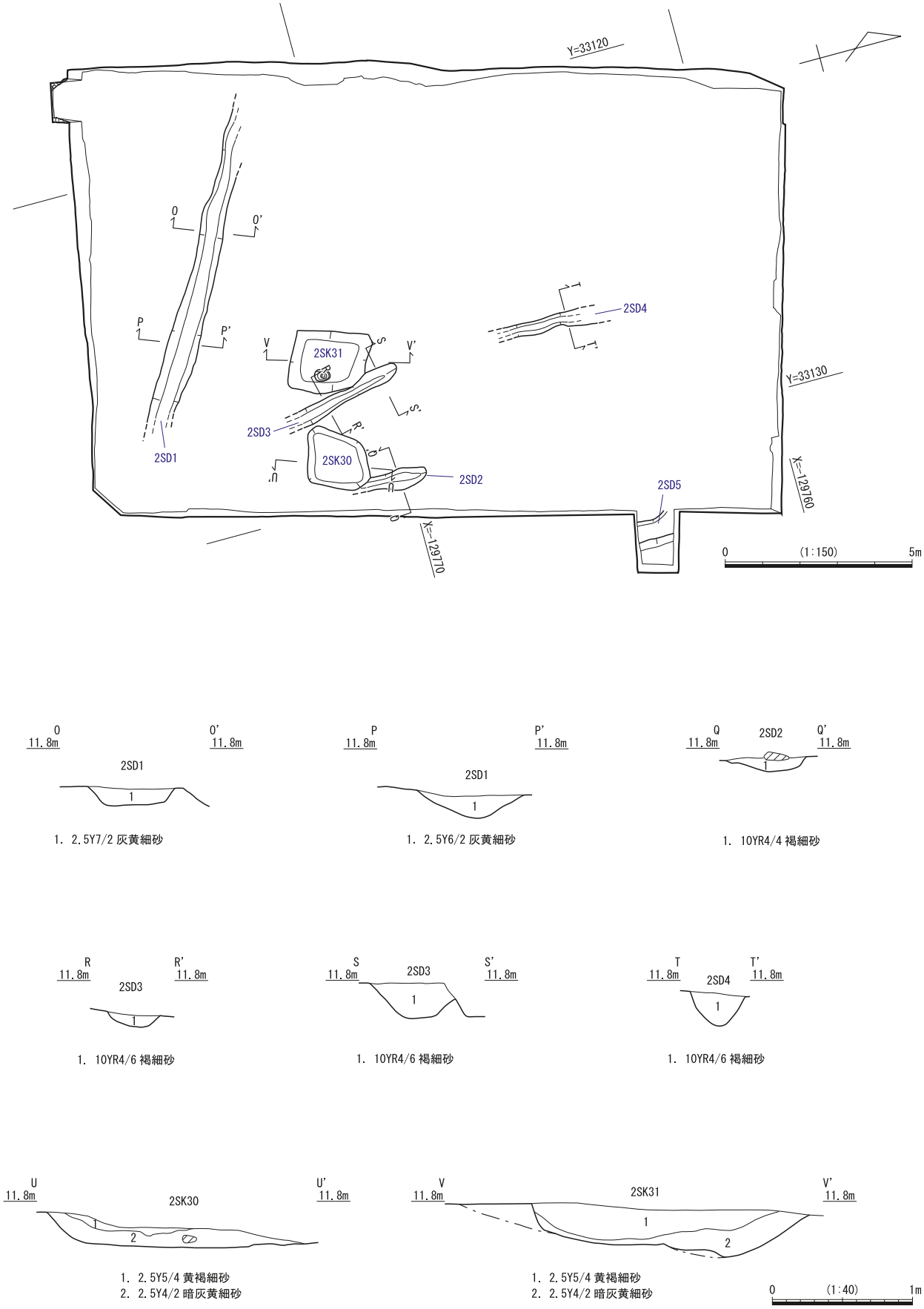


図7　調査区 平・断面図（第2面）

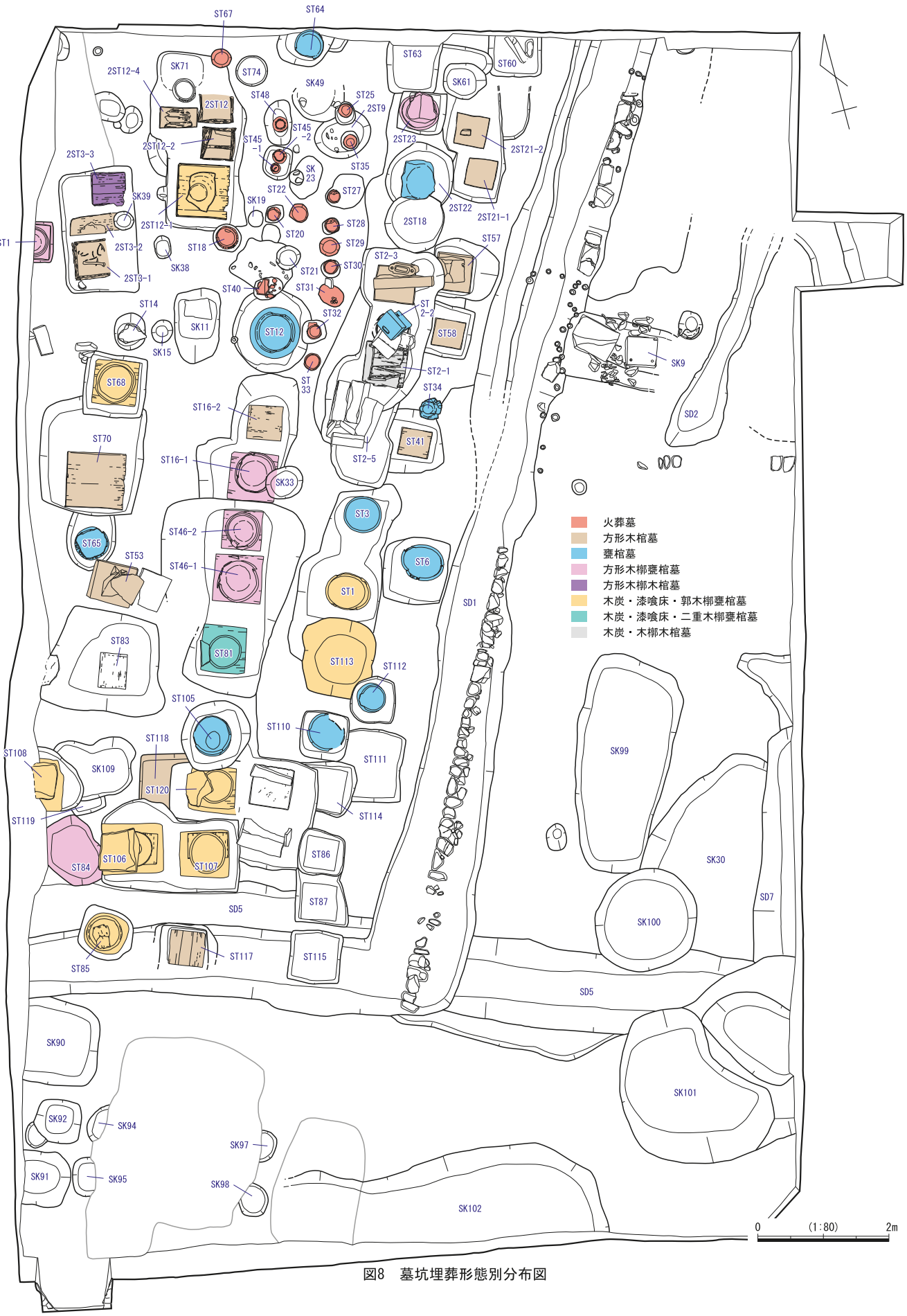
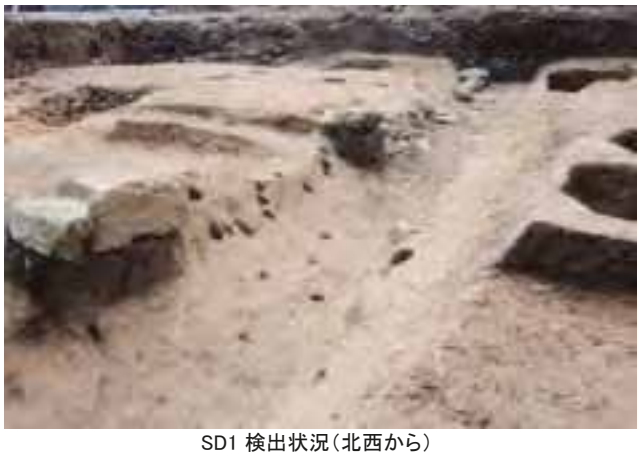


図8　墓坑埋葬形態別分布図

写真図版１

調査区 北半 第1面全景（南東から）

調査区 南半 第1面全景（南東から）



SD1 検出状況（北西から）

火葬墓群検出状況（北東から）

ST25 検出状況（東から）

ST30 検出状況（東から）

ST32 検出状況（東から）

ST33 検出状況（東から）

写真図版 3

ST45-1・2 検出状況（西から）

ST48 検出状況（西から）

ST16-1・ST46-1・ST16-2 検出状況（北西から）

ST1・3 検出状況（南から）

ST2 上層 検出状況（北から）

ST2-1～5 検出状況（北から）

ST12 検出状況（南東から）

ST12 甕棺全景（北から）

ST81・105・120 断割状況（東から）

ST120 断割状況（東から）

2ST3-1 検出状況（東から）

2ST3-1～3 断割状況（東から）

2ST3-1 土師器皿出土状況（東から）

2ST3-3 木棺検出状況（東から）

写真図版 5

2ST12-1～3 検出状況（北から）

2ST12-1～3 断割状況（東から）

2ST12-1 甕棺検出状況（東から）

2ST12-1 木槨検出状況（東から）

2ST21-1 木棺検出状況（東から）

2ST21-2 木棺検出状況（東から）

2ST23 検出状況（西から）

2ST23 断面状況（東から）

1 ST16-1 出土副葬品

2 SK61 出土副葬品

3 SK71 出土施釉陶器壺

4 2ST3-1 出土眼鏡

5 ST16-1 出土墨書甕棺

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひめじじょうじょうかまちあと
書 名	姫路城城下町跡
副 書 名	姫路城跡第408次発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第97集
編 著 者 名	山下　大輝
編 集 機 関	姫路市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL(079)252-3950
発 行 年 月 日	令和2年（2020年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし） 北条口二丁目77（ほうじょうぐちにちょうめ）	28201	020169	34° 49′ 46″	134° 41′ 43″	2019.1.8 ～ 2019.3.15	462㎡	住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
集落跡	江戸時代	土葬墓、火葬墓	土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦	20180377

要約	今回の調査では、江戸時代に機能した幡念寺境内の墓域を検出し、土葬墓・火葬墓を多量に検出した。これらの墓域は、17世紀前葉から少なくとも19世紀ごろまでは機能していたことが明らかになった。近世以降の墓域をまとまって検出した調査事例は、播磨地域においてはあまり知られておらず、近世播磨地域の墓制を考える上で非常に重要な成果を得た。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第97集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第408次発掘調査報告書―

令和2年（2020年）3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2